

CONTENTS

- 【研究員 調査・研究レポート】長野県志賀高原の植樹について 1
- 【緑回復の知恵】環境保全林の自然性評価手法の開発 その3 4
- 【森づくりの現場から】「イオン ふるさと森づくり」25年のあゆみ 6
- 【事業報告】神奈川県内関係機関との連携 8
- 【お知らせ】「あさひ・いのちの森」10周年記念誌発行 9
- 【研究員活動記録】2017年7月1日～11月30日 10
- 【編集後記】 10



【研究員 調査・研究レポート】
長野県志賀高原の植樹について

IGES 国際生態学センター主幹研究員／目黒伸一

はじめに

長野県志賀高原では2014年から毎年植樹祭が行われている。この始まりはニュースキャスターなどを務められていた故・小林麻央さんの夫である歌舞伎役者の市川海老蔵さんが環境によいことを行いたいと故・小林麻央さんに相談したところ、当時ニュース番組などを通じて懇意であった宮脇 昭国際生態学センター終身名誉センター長を紹介され、竹節義孝山ノ内町町長や阿部守一長野県知事をはじめ山之内役場の皆さん等様々な方々の協力を得て、志賀高原での植生回復プロジェクトを開催するに至った。

当地は国立公園内に位置し、かつてスキー場のゲレンデであった斜面がスキー場の閉鎖に伴い、放置されたところであり、この場所の潜在自然植生を考慮して、本来あるべき森に再生することを目的としている。これを市川海老蔵さんのお名前とかけて「いのちを守る

森」づくり ABMORI (エビモリ) プロジェクトと命名されている。

毎年植樹祭では市川海老蔵さんのファンをはじめ、地元の人や植樹の趣旨に賛同される方々が、全国から集まり行われている。著名な方の環境活動ということでメディアの注目も高いため、テレビなどでその様子をごらんになられた読者もいらっしゃるかもしれません (写真1)。

当初の植樹祭で植栽指導や植樹の重要性、イベントの背景などの説明を行っていた宮脇国際生態学センター終身名誉センター長から私がその役割を引き継ぐ形で現在に至っている (写真2)。

地元との共同作業

その毎年行われる植樹祭では単なる緑化イベントにとどまらず、様々な工夫が凝らされており、地元の活



写真1. 植樹祭の様子



写真3. 山取された実生の苗床



写真2. 植樹祭での植樹方法などの説明風景



写真4. 植樹祭前の植樹リーダー研修の様子

動を盛り上げる一端を担っている。植栽に地元産の苗木を用いるのはもちろんであるが、植栽地は水はけが悪い粘土質土壌であるため、地元長野産キノコの培地に使用されたおが屑の廃材を発酵させて、植栽土壌に混ぜ込み、土壌改良に有効利用している。

また、植樹祭では地元の小学生たちも参加している。植樹祭の前にはコカリナ（伐採を余儀なくされた地元樹木から作られたオカリナ）による演奏が小学生によって紹介され、参加者の好評を博している。この小学生たちは植樹祭で苗木を植えるだけでなく、苗木を育てる試みも行っている。植栽地は標高 1,700 メートル前後に当たり、植生学的には亜高山帯と冷温帯の境界域に相当する。日本の亜高山帯の自然林では落葉広葉樹とともにシラビソ、オオシラビソ、コメツガ、トウヒなどの常緑針葉樹が生育する。森づくりに必要なポット苗は全国で生産されているが、これら標高の高いところに出現する針葉樹のポット苗はほとんどつくられていない。そこで、この小学生たちが周辺地から山取してきた苗を育てている。通常の苗よりも生長に時間がかかり、一般に山取苗は種子から育てたポット苗よりも生存率が低くなるなど難しいことは多々あります

が、がんばってほしい（写真3）。

また、イベント参加者の多くの方々は植樹に不慣れであり、さらに参加者数も 1,000 人単位に上るため、植樹リーダーの存在が不可欠になる。この植樹リーダーは参加者を班ごとに割り当てられた植栽地へ誘導し、植栽の手順や注意事項を説明し、周囲に気を配りながらスムーズに植栽を進めていく重要な役割がある。その植樹リーダーの多くが長野県立中野西高校の生徒さんで構成されている。この高校生たちの多くも実は植樹祭の経験がなく、正直なことをいうと事前説明会では多少の不安を覚えた。しかし、植樹祭当日の朝、現場で植樹リーダーの説明を（多少）厳しく説明すると、その役割を改めて認識し、いつもしっかりと遂行してくれる。特に 2017 年は雨に見舞われて足場はぬかるみ、とても難しい状態の植樹祭だったが、高校生たちはとても忍耐強く役割を果たし、感銘した（写真4）。

ユネスコエコパークとユネスコスクール

植栽地のある志賀高原は日本に登録されている 9 地域のユネスコエコパークのひとつにあたる。世界自然

遺産が顕著な普遍的価値を有する自然地域を保護・保全するのが目的であるのに対して、ユネスコエコパークは、生態系の保全と持続可能な利活用の調和を目的としており、保護・保全だけでなく自然と人間社会の共生に重点が置かれている。その文脈に沿って多くの方々が保全や自然の利用方法などに関わって活動している。

一方、前述した小学生や高校生の所属する学校はユネスコスクールに指定されている。ユネスコスクールとは、地球規模の問題に対する国連システムの理解、人権・民主主義の理解と促進、異文化理解、環境教育といったテーマについて、質の高い教育を実践する学校であり、このプロジェクトでは環境関係について実践教育を行っているといえる。また、中野西高校では、植樹祭の手伝いだけでなく、植えられた樹木のモニタリング調査も行っている。みなさんとともに植えられた樹木はそのまま放置するよりも、生長データを収集することで植栽における問題点を明らかにし、その後の植栽に役立てることができる。また、亜高山帯における植栽樹種の新たな生態学的知見が獲得されることが期待され、2017年のモニタリング調査では80人もの生徒さんが参加した。植樹祭を含め大人数の生徒が参加していることも出色といえる。現在、自主的にこれまでのデータを取りまとめ、学会等に発表の準備を進めているところであり、わたしも微力ながらお手伝いを続けていきたいと考えている。(写真5,6)。

おわりに

バブル期など、かつてはゴルフ場とともに大規模開発や環境破壊の象徴としてやり玉に挙がっていたスキー場が生態系回復を目指している姿は、感慨深いものがある。

また、いわゆる宮脇方式による植生回復事業の中でも、亜高山帯におけるプロジェクトは非常に珍しいといえる。

それだけに一過性のイベントではなく、学術的や教育的な活動などを含んだ多面的なプロジェクトとして価値を高めていけるよう努力していきたいと考えている。

多雪と冷涼な気候から想像できるように植えられた樹木の生長は速くはない。しかし、回復困難なところほど森づくりが求められるのも確かなことである。一度壊された自然を元通り、あるいは最上のものにするの難しさを痛感しつつ、より長くこのプロジェクトが続くことを願っている。(写真7)。



写真5. 植栽地モニタリング調査区の様子 ナンバリングを樹木に付け、位置図に落とし、測定する。



写真6. 中野西高校生徒による植栽樹木モニタリング



写真7. 植栽された斜面 (2017年9月24日撮影)



「その1」(JISE ニュースレター 76号)と「その2」(同77号)では暖温帯域の照葉樹環境保全林を対象とした評価手法の概略について説明した。ここでは「その3」として冷温帯域の落葉広葉樹環境保全林の自然性回復の評価解析について紹介したい。なお、落葉広葉樹環境保全林の造成事例が少ないことから、残念ながら著者はこの解析に適用できるようなデータを持ち合わせていない。データをお持ちの方は本手法を試みていただきたい。

解析は群落の構造と種組成の面から検討した。構造面の要素である、樹高、樹幹の太さ、立木密度、低木層植被率、草本層植被率の5項目は、照葉樹環境保全林解析と同様である。

種組成面では、カエデ科、ツツジ科、ユリ科とシダ植物を選出した。結果として高木・亜高木、低木、草本と階層別の植物が選ばれたことになった。分類が比較的容易であるグループであることも考慮している。各グループに含まれる種が地点あたりに何種出現するかをものさしとしている。さらにこれら4グループのほかに、地点あたりの全出現種数を加えた。これには植栽した種類は除外してある。これら5項目を種組成面からの解析のための尺度としている。

引用文献にあるような地域植生をまとめた報告書(下記の引用文献はいずれも宮脇ほか)からブナ林(一部ミズナラ林を含む)の群落組成表を基に表1を作成した。

群落構造の要素としては、①高木層の樹高、②低木層植被率、③草本層植被率の3項目について地域・植生ごとにその平均値を求めた。なお、上記の群落組成表には樹幹の太さと立木密度のデータが欠落しているので、環境保全林で実践する場合には、この2つの要素を新たに追加測定する必要がある。

種組成の要素としては、地点あたりのユリ科、シダ植物、ツツジ科、カエデ科の各グループの平均出現種数を算出し、さらには地点ごとに出現した植物の総種数の平均を表記している(表1)。

なお、ユリ科は旧分類によるものである。

これらの数値を参考に表2のようにそれぞれの評価点を1~5のランクに区分した。その結果は、図1のようなレーダーチャートで表示するか、各項目についてランク1に2点、ランク2に4点、ランク3に6点、

ランク4に8点、ランク5に10点の配点を与え、10点×10項目の100点満点で評価することになる。

IGES 国際生態学センターの矢ヶ崎朋樹主任研究員には表の作成にご協力いただいた。林 寿則主任研究員には本誌への掲載でお世話になり、また、写真を提供していただいた。御礼申し上げたい。

【引用文献】

- 那須沼原湿原とその周辺地域の植生 (1971)
- 高瀬川流域の植生 (1974)
- 群馬県武尊山麓の植生 (1974)
- 姥屋敷の植生 (1977)
- 八幡平の森林植生 (1978)
- 高島町の植生 (1983)
- 塩那道路周辺(栃木県)の植生 (1984)
- 若狭湾沿岸地域の植生 (1984)

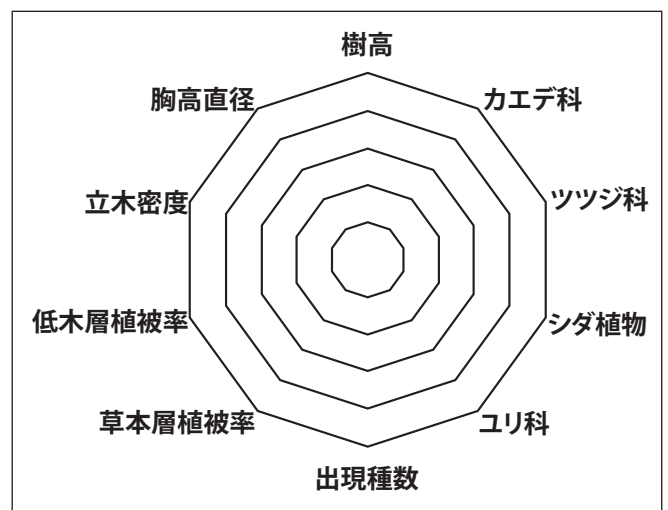


図1. 評価のためのレーダーチャート

表1. 冷温帯域の自然林における群落構造と各分類群の地点当たりの種数

地域*	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	
植生**	A	A	B	C	A	A	C	C	D	E	C	平均
資料数	10	11	12	5	6	14	22	7	10	6	5	108
高木層樹高(m)	19.2	20.4	16.3	20.6	13.2	25.4	23.9	17.1	17.8	18.0	18.2	19.1
低木層植被率(%)	41.0	58.6	55.0	68.0	78.3	56.4	54.3	50.0	42.0	50.0	51.0	55.0
草本層植被率(%)	55.0	32.3	29.6	40.0	25.0	42.5	37.9	52.9	73.0	46.7	50.0	44.1
ユリ科植物種数	4.1	1.5	2.1	3.2	5.5	2.1	3.4	2.7	1.7	0.7	1.8	2.6
シダ植物種数	5.9	3.0	3.0	5.4	2.0	3.5	3.8	2.3	1.8	3.2	4.6	3.5
ツツジ科植物種数	2.5	4.5	3.8	1.8	7.0	3.1	0.2	0.9	3.9	1.3	2.0	2.8
カエデ科植物種数	4.8	3.2	4.2	2.8	4.2	2.5	2.0	4.1	3.9	4.0	3.4	3.6
出現種数	41.5	36.4	47.5	44.2	47.0	30.0	37.9	29.6	36.8	29.3	50.4	39.1

* ①長野県高瀬川、②③山形県高島町、④⑤岩手県姥屋敷、⑥⑦秋田県八幡平、⑧⑨は栃木県那須と塩那、
⑩群馬県武尊山、⑪福井県若狭湾

** A: マルバマンサク-ブナ群集 B: オオバクロモジ-ミズナラ群集 C: ヒメアオキ-ブナ群集
D: コカスゲ-ブナ群落 E: ブナ-ミズナラ林

表2. 冷温帯域における評価項目とランク区分

ランク 評価項目	1	2	3	4	5
樹高(m)	5未満	5~10未満	10~15未満	15~20未満	20以上
胸高直径(cm)	10未満	10~20未満	20~30未満	30~40未満	40以上
立木密度(本/25㎡)	30以上	20~30未満	10~20未満	5~10未満	5未満
低木層植被率(%)	10未満	10~20未満	20~30未満	30~40未満	40以上
草本層植被率(%)	10未満	10~20未満	20~30未満	30~40未満	40以上
ユリ科植物種数	1未満	1~2未満	2~3未満	3~5未満	5以上
シダ植物種数	1未満	1~2未満	2~3未満	3~5未満	5以上
ツツジ科植物種数	1未満	1~2未満	2~3未満	3~5未満	5以上
カエデ科植物種数	1未満	1~2未満	2~3未満	3~5未満	5以上
出現種数*	5未満	5~10未満	10~20未満	20~30未満	30以上

* 外来種は除く



写真1. ブナやカエデを構成種とする鎮守の森



写真2. 冷温帯域に形成されている環境保全林



【森づくりの現場から】

「イオン ふるさとの森づくり」 25 年のあゆみ

イオン株式会社グループ環境・社会貢献部 / 木下順次

はじめに

イオンはイオンモール・イオンスタイル、マックスバリュ、ミニストップなどの様々な業態の店舗を中心に、金融、サービス、ディベロッパー事業など小売業にかかわる様々な事業を展開する企業集団である。「お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する。」という基本理念を掲げ、商業を通じて地域社会に貢献することを目指している。

また他方、イオンでは 1990 年代より買い物袋持参運動や、店頭リサイクル活動など、消費者目線での環境・社会貢献の取り組みを積極的に実践し、こうした分野で一定の評価をいただけるまでになってきた。

本稿で紹介する「イオンふるさとの森づくり」は、本業と社会貢献の接点にある活動として我々が最も力を入れている活動である。グループ企業 329 社、店舗数 2 万 1113 店、従業員数 52 万人を擁する企業となる中、ともすれば薄れがちな理念の共有や企業 DNA の継承の観点でも非常に優れた活動として、イオンをイオンたらしめる象徴的な活動として位置付けている。

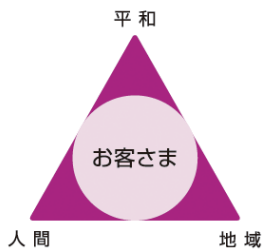
時間程度で植えきってしまう現場は壮観である。

本活動はイオンが取り組む環境・社会貢献活動の中でも、もっとも初期から実践している活動の一つであり、毎年着実に植樹本数を増やし続けてきた。25 年を経た現在では日本・アジア諸国で 920 拠点 1144 万本を超える実績となっている※。



写真1. イオンモール堺鉄砲町での植樹祭の風景

イオンの基本理念



お客さまを原点に平和を追求し、人間を尊重し、地域社会に貢献する。

イオンは基本理念のもと、**絶えず革新し続ける企業集団**として、「**お客さま第一**」を実践してまいります。

図1. イオンの基本理念

通常の小売業の場合、お客さまとの最初の接点は開店時の売場である。イオンの場合、従業員は開店前の植樹祭で初めてのお客さまと接する。この経験はお客さま・従業員の双方に貴重な経験として記憶されることが多く、木々の成長を楽しみにしていただいている様子は 10 年 20 年経過したのちも店舗に寄せられるご意見から推察できる。

※イオン環境財団による植樹、東北復興植樹を含む

森づくりの取り組み

1991 年より「イオンふるさとの森づくり」という取り組みを進めている。全国各地に新しく開店するショッピングセンターの駐車場の周りに、地域の潜在自然植生に基づき選定された 30 ~ 70 種の樹木を近隣の住民（お客さま）とともに植樹をする活動である。小型 SM でも 5 千 ~ 1 万本、大型のショッピングモールになると実に 3 万 ~ 5 万本という植樹をおこなう。植樹祭にご招待する近隣のお客さまは 3 千 ~ 5 千人を超え、老若男女おおくの市民がポット苗を手に取り 2

取り組みの工夫

店舗の駐車場への植樹が中心となるため、敷地外周に線状に植えることが多く、まとまった面での植栽がとれない場合が多いが、10 年を超えると樹高も 5 ~ 10m 程度となり緑の壁として機能し始める。

ただし、歩行者・自動車の交錯する駐車場内に植樹することから、見通し確保が最優先の管理項目となるため一定の手を加えざるを得ない。これまで植樹方法を長年ご指導いただいている宮脇昭終身名誉センター長に様々なアドバイスをいただきながらショッピングセンターの植栽としてふさわしい管理手法を模索して

きた。

現在では、「防犯・防災や施設管理上の問題を回避しながら自然の森として生態学的な価値を維持する」という考えの下、マニュアルの整備や、研修会等を通じて施設管理者、管理委託業者ともに力量の向上に努めている。



写真2. 実地研修を受講する店舗の施設管理責任者

見通しの確保について

考え方の原則は、隣接住宅や荷捌き場の目隠しとして緑の壁のまま手をかけずに維持することであるが、そのようなエリアは残念ながら僅かである。対して駐車場内のほとんどのエリアでは、中木は最大3mの高さまで枝葉を落とし、株立ちする低木は1.2mの高さで刈り込みを行い、歩行者・運転者の視界を確保する。



写真3. 視界を確保した植栽帯

4～5本/m²の高密度植栽でも、樹木の生長点を伐ったり、間伐などの不自然な管理を行わずに視界を確保することは十分に可能である。さらに本来的な森の価値を高める管理手法の探求を継続していきたい。

ふるさとの森の様々な価値とその活用

ショッピングセンターの修景としてだけでなく、「ふるさとの森」の持つ多様な価値を明らかにして、お客さま・従業員とともに共有していきたいと考えている。2009年からは二酸化炭素の吸収固定量を推定するための手法開発を行い、事業活動によるGHGの収支計算に活用してきた。本年からは、生物調査（野鳥・昆虫）を行い、ふるさとの森そのものの価値に加え、周辺環境に対する環境貢献価値を明らかにする予定である。

また、年間を通じて体験型環境学習を提供する「イオンチアーズクラブ」の活動の一環として、地域の専門家・ボランティア団体等と連携したふるさとの森自然観察会を試験的に開催している。様々な生き物の観察を通じて得られる、小さいながら一つの生態系が「イオンの森」の中に出来あがっているという気付きは、参加者に新鮮な驚きを与えるようである。「ふるさとの森」が身近な環境教育のフィールドとして活用できる場であることを多くの市民に知ってもらいたい。



写真4. チアーズクラブ自然観察会

おわりに

25周年を機に2014年からスタートした「イオン森の循環プログラム」のテーマは「植える、育てる、活かす」である。25年かけて我々はお客さまとともに多くの苗木を植えてきた。次の25年はその木々を立派に育て、地域社会に様々な価値を提供する森とすることで貢献してゆきたい。



IGES 国際生態学センターでは、神奈川県内の関係機関と事業連携（環境教育活動、人材育成事業、普及啓蒙活動など）を進めています。ここでは、平成 29 年 7 月から 10 月にかけて行われた連携事業について報告致します。

1. 横須賀市自然・人文博物館

7 月 22 日（土）、横須賀市の天神島臨海自然教育園にて環境学習会「はかせといっしょに海辺の生きものをしらべよう」を開催しました。当日は大人・子どもあわせて 14 名が参加。IGES-JISE 矢ヶ崎朋樹、横須賀市自然・人文博物館学芸員の山本薫博士とともに、島内陸域の生物を中心に記録・観察しました。この学習会は、同博物館の全面協力を得て実施されています。

2. 葉山しおさい博物館

7 月 29 日（土）、葉山町の一色海岸にて環境学習会「海辺の生き物なんでも観察会」（葉山しおさい博物館主催、IGES-JISE 共催）を実施しました。当日は葉山しおさい博物館・倉持卓司氏、IGES-JISE 矢ヶ崎朋樹が講師を務め、参加者 13 名とともに海岸の動植物を観察しました。当日の朝には「一色海岸でウミガメが産卵した」との情報が入り、産卵巣の保全にも取り組みました。

3. 神奈川県立産業技術総合研究所

神奈川県立産業技術総合研究所（KISTEC）は、県内の産業と科学技術の振興を図るための試験研究機関として平成 29（2017）年 4 月に誕生しました。今回、夏休み中の子ども達に科学やモノづくりの楽しさを体験してもらう「かわさきサイエンスチャレンジ（同運営委員会主催 8 月 5-6 日）」が小中学生ら約 4,500 人の参加により川崎市高津区のかながわサイエンスパーク（KSP）で開かれました。IGES-JISE は 8 月 5 日（土）、「KISTEC 青少年科学技術フィスティバル 2017」において「植物のチョーすご技—“あっ”と驚く植物のすごい能力」と題して「火を防ぐ木の話」（講師：IGES-JISE 林寿則）、「風に舞って飛んでいくタネの話やタネ模型をつくり飛ばしてみる工作・実験教室」（講師：IGES-JISE 矢ヶ崎朋樹）を実践しました（写真 1）。午前・午後の部で計 91 名の参加者がありました。

4. 三溪園

8 月 12・13 日の 2 日間、横浜市中区の三溪園にて環境学習会「はかせといっしょに身近な生きものをしらべよう」を開催しました。当日は大人・子どもあわせて 47 名が参加。IGES-JISE 原田洋・矢ヶ崎朋樹の両博士、三溪園の羽田雄一郎氏とともに、園内の生物を記録・観察しました。夏休み期間中の開催のこともあり、両日ともに満員御礼。多くの皆様にお申込みいただきました。

5. 神奈川県立生命の星・地球博物館

9 月 30 日（土）、横浜市戸塚区舞岡にて野外観察「秋の里山の植物」（生命の星・地球博物館主催、IGES-JISE 共催）を実施しました（写真 2）。当日は同館学芸員の田中徳久氏、大西亘氏、勝山輝男氏、IGES-JISE 矢ヶ崎朋樹が講師を務めました。

参加者 22 名はルーペを使って花や実のつくりをじっくり観察したほか、においを嗅いだり、触れたりしながら野草・樹木を学習しました。



写真 1. タネが落下する様子を本物のタネを使って実演



写真 2. 身近に生えている植物の特徴をじっくり観察

6. 神奈川県自然環境保全センター

10月14日(土)、自然環境保全センターにて自然観察指導技術研修会が実施され、IGES-JISE 矢ヶ崎朋樹が「学んでおきたい里山の植物とその利用」と題した講義を行いました(写真3)。27名の参加者は、自然観察会での指導テクニックや植物の様々な話題を吸収しようと熱心にメモを取っていました。事後アンケートでは「身近なテーマで内容も分かりやすく良かった」、「実際に材を見比べたり、野外実習で観察したことでより深い理解につながった」、「今後の観察会の良いヒントになった」など、嬉しい多くの声が寄せられました。



写真3. 顕微鏡やルーペを使って木材標本を観察



【お知らせ】

「あさひ・いのちの森」10周年記念誌発行

IGES 国際生態学センター上席研究員／村上雄秀

2005年から2年間、国際生態学センターが現地植生調査と設計を行い、2007年の植樹祭から成長をはじめた旭化成(株)富士支社(静岡県富士市田子の浦)内の約1haの自然再生地、「あさひ・いのちの森」の10周年記念誌が印刷されました。あさひ・いのちの森は工場敷地内の平地に造成された3本の尾根とそれに挟まれた2本の谷を持つ緑地で、富士川を源流とする流れが山腹から山裾を流れています。森の大半は自然林(環境保全林)ですが、北側の水田を中心として里山林、湿原、二次草原、池が配置され、富士市田子の浦の多彩な生態系、景観を再生しています。

国際生態学センターなどによるモニタリング調査が10年間継続的に実施され、植物相は300種(2016年調査)、昆虫相は437種(2015年調査)が記録されています。静岡県で分布が限られるオニナルコスゲやナヨナヨワスレナグサも旺盛に生育しています。植栽された樹木は樹高10mに達しました。里山は本来の管理を行うため伐採実験が進行中です。

人工的に作られ、複合した植生を地形に応じて配置した、景観の再生を目指す「エコトープ」として希有な存在であり、今後もその成長と生物多様性の充実が期待されています。

10周年記念誌はこの森の概要、作られた経緯、苦労話、モニタリング調査結果などが掲載されています。

AsahiKASEI

あさひ・いのちの森 10周年記念誌



旭化成株式会社 旭化成ホームズ株式会社

お問い合わせ、入手希望の方は ecoinfom@jise.jp へご連絡ください。

【研究員活動記録】

- 7/1-6 : ラオス・ルアンプラバン県森林資源調査(矢ヶ崎)
 7/5-6 : 静岡県富士市「あさひ・いのちの森」生長調査(村上・林)
 7/9-18 : マレーシア植生調査(目黒)
 7/10 : IGES-JISE 生態学研修(基礎コース) 講師(村上)
 7/10-12 : 同研修 講師(矢ヶ崎)
 7/13-17 : 四国海岸林調査(村上)
 7/15 : 「東京に、どんぐりから木を育てて森を作ろう」実行委員会シンポジウム行動提起(矢ヶ崎)
 7/22 : IGES-JISE 環境学習「はかせといっしょに海辺の生きものをしらべよう」講師(矢ヶ崎)
 7/24-25 : 長野県植栽地調査(目黒)
 7/27 : 植生学会(横浜)(村上)
 7/28 : 静岡県富士市「あさひ・いのちの森」管理検討会(村上)
 7/28-30 : 長野県植樹祭及び調査(目黒)
 7/29 : 葉山しおさい博物館「海辺の生きものなんでも観察会」講師(矢ヶ崎)
 8/2 : 葉山一色海岸アカウミガメ産卵立地環境調査(矢ヶ崎)
 8/2-3 : 宮城県大崎市植栽計画地調査(村上・林)
 8/4 : 葉山一色海岸アカウミガメ産卵立地環境調査(矢ヶ崎)
 8/5 : KISTEC 青少年科学技術フェスティバル2017「植物のチョーすご技」講師(矢ヶ崎・林)
 8/7-11 : 四国海岸林調査(村上)
 8/12-13 : IGES-JISE 環境学習「はかせといっしょに身近な生きものをしらべよう」講師(矢ヶ崎)
 8/22 : 植生学会(横浜)(村上)
 8/24-25 : 神奈川県座間市イオンモール植生調査(村上)
 8/25-30 : ラオス・ルアンプラバン県森林資源調査(矢ヶ崎)
 8/29-30 : 秋田県植栽地調査(目黒)
 8/29-9/3 : 東北地方防災海岸林調査(村上)
 9/5 : IGES-JISE 運営委員会(村上・林)
 9/9 : 二子玉川公園ビクターセンター植樹5周年レクチャー「いのちの森を知る 感じる 考える」講師(矢ヶ崎)
 9/9-17 : ケニア植生調査(目黒)
 9/11-15 : 四国海岸林調査(村上)
 9/15-21 : ラオス・ルアンプラバン県森林資源調査(矢ヶ崎)
 9/19 : 静岡県富士市「あさひ・いのちの森」生長調査(村上・林)
 9/21-22 : 広島県広島市イオンモール植生調査(村上)
 9/23-24 : 長野県植栽地調査(目黒)
 9/25-29 : 秋田県植栽地調査(目黒)
 9/30 : 神奈川県立生命の星・地球博物館 野外観察「秋の里山の植物」講師(矢ヶ崎)
 10/1-5 : 四国海岸林調査(村上)
 10/1-14 : つくば樹木医研修(目黒)
 10/6 : 植生学会(横浜)(村上)
 10/7-8 : 宮城県大崎市 JR 東日本植樹祭指導(村上・林)
 10/12-13 : 福島県いわき市イオンモール植生調査(村上)
 10/14 : 神奈川県自然環境保全センター「自然観察指導技術研修会」講師(矢ヶ崎)
 10/20-23 : 植生学会沖縄大会参加・発表(村上・目黒)
 10/25-26 : 岩手県大槌町植樹地生長調査(林)
 10/28-11/1 : NPO 法人 WE21 ジャパン「フィリピン ベンゲット州ルボ村モニタリング事業」現地調査(矢ヶ崎)
 10/31-11/2 : 静岡県富士市「あさひ・いのちの森」生長調査(村上・林)
 11/7 : 宮城県大崎市 JR 東日本植栽地調査(村上)
 11/8 : 環境省植生図中部ブロック会議(名古屋)(村上)
 11/12-14 : IGES-JISE 植生調査研修 講師(矢ヶ崎)
 11/15-19 : 四国海岸林調査(村上)
 11/19 : IGES-JISE 共催事業「等々力渓谷公園どんぐり拾いウォーキング」講師(矢ヶ崎)
 11/21 : 静岡県富士市「あさひ・いのちの森」管理検討会(村上)
 11/22 : 植生学会(横浜)(村上)
 11/23 : IGES-JISE 環境学習「どんぐりっておもしろい!」講師(矢ヶ崎)
 11/25 : 千葉大学環境学習講師(目黒)
 11/28 : 昭島市環境学習講座「いのちがつながっているー生物多様性を考えよう」講師(矢ヶ崎)
 11/28-12/1 : 東北地方防災海岸林調査(村上)

◆ 編集後記

2018年の干支は「戌」です。この字は刃物で作物を刈り取り、ひとまとめに締めくく様子(収穫)を意味するとのこと。ところでイヌの名が付く植物には、イヌツゲ、イヌザンショウ、イヌガヤ、イヌビワ、イヌマキ、イヌブナなどがあります。これらはサンショウに似ているけれども香りがサンショウほどではない、または、ブナに似ているけれども材質がブナに劣るなど、役に立たない、質が劣るなどの意味で付けられています。(林 寿則・大槻みき子)

JISE Newsletter Vol.78

発行者：(公財) 地球環境戦略研究機関 国際生態学センター 発行年月日：2018年1月20日

〒222-0033 横浜市港北区新横浜 2-14-27 新横浜第一ビルディング 3F Tel:045-548-6270 Fax:045-472-8810

E-Mail:ecoinfom@jise.jp URL:http://www.jise.jp

※この冊子は再生紙(古紙配合率100%)を使用しています。